



2020 年全日本スーパーフォーミュラ選手権 第 7 戦(最終戦)：富士スピードウェイ (静岡県駿東郡小山町) レース報告書

予選: 12 月 20 日(日)

| | |
|-------|--|
| 天候 | 晴れ |
| 観客動員数 | 9,700 人 |
| 成績 | 大津 弘樹 選手(#64): 15 位 大湯 都史樹 選手(#65): 7 位 |

決勝: 12 月 20 日(日)

| | |
|-------|--|
| 天候 | 晴れ |
| 観客動員数 | 9,700 人 |
| 成績 | 大津 弘樹 選手(#64): 13 位 大湯 都史樹 選手(#65): 2 位 |

いよいよ最終戦を迎える SUPER FORMULA 2020 シーズン。今年は新型コロナウイルス感染拡大の影響を受け、約 3 ヶ月半のタイトなスケジュールで行われ、最終戦は前例のない 12 月の富士スピードウェイで開催されます。今大会も厳しい寒さが予想されたことからタイヤウォーマーの使用が認められました。

前回の鈴鹿大会(第 6 戦)では、ルーキーの大湯都史樹選手が 2 番グリッドスタートから初優勝を果たし波に乗る TCS NAKAJIMA RACING ですが、64 号車の牧野任祐選手が病気のため欠場となったため、代走として SUPER GT で活躍する大津弘樹選手を起用し、最終戦に臨むことになりました。

<公式予選>

A グループ出走した大湯選手は 2 番手タイムで Q1 を突破した一方、B グループから出走した大津選手は 8 番手タイムで惜しくも Q1 で敗退します。大湯選手は Q2 を 2 番手で突破し Q3 進出を果たします。

Q3 では最終戦らしい上位 8 台による熾烈な戦いが繰り広げられ、大湯選手は 7 番グリッドを獲得します。

<決勝レース>

決勝レースでは、フォーメーションラップで出火のトラブルに見舞われたマシンが発生し、17 台でスタートを切ることになります。7 番グリッドからスタートを切った大湯選手はポジションを維持してオープニングラップを終え、10 周を終えたところでピットイン、タイヤ交換を行います。9 番手でコースに復帰したあと、徐々にピットインを行うマシンが現れ、少しずつポジションを上げていきます。

30 周を迎える頃には 4 番手に浮上し、その後、3 番手のマシンのオーバーテイクにも成功し、いよいよ表彰台圏内へ。さらに 2 番手のマシンも確実にパスし、1 年間の集大成となるレースを展開した大湯選手は 2 位フィニッシュとなりました。一方、64 号車の大津選手はオープニングラップで一つポジションを落としますが、その後は着実に周回を重ねていきます。11 周目の終わりにタイヤ交換を行い、最後まで安定したラップタイムを刻み続け、13 位でレースを終えました。

なお、大湯選手は、今大会の 2 位入賞により、「ルーキー・オブ・ザ・イヤー」を獲得しました。

<コメント>

中嶋 悟 総監督:

「2人ともよく頑張ったと思います。大湯はいいレースをしましたし、ピンチヒッターの大津も頑張ってくれました。今年得たものはしっかりと引き継ぎ、来年に向けて順調にスタートできるようにこれから準備をしていきます。大変な1年でしたが、無事に終えることができ、関係者のみなさま、ファンのみなさまには本当に感謝しています。来シーズンもどうぞよろしくお願いいたします」

大津 弘樹 選手:

「今回は牧野選手の代役として **SUPER FORMULA** を戦いました。なにより牧野選手の体調が心配ですが、急遽、代役として私を起用してくれたチームに感謝しています。急ピッチで決まった参戦でしたが、**SUPER GT** では **GT500** クラスで共に戦うドライバーが多いこともあり、自分の実力を試したい気持ちがありました。しかし **SUPER FORMULA** は非常にハイレベルなレースで、予選前の練習走行が2時間しかない中で、容易に慣熟することはできず、壁の高さを感じました。自分のパフォーマンスを **100%** 発揮できたかと問われるなら、もっとやるべきことがあったと思いますし、レースを終えた直後の今は様々な感情が込み上げてきています。ただ、ひとことで言えば、とても素晴らしい経験になりました。**SUPER GT** だけでは体得できない経験をさせてもらったので、これは今後生きてくるはずですし、活かさねばなりません」

大湯 都史樹 選手:

「野尻智紀選手 (**TEAM MUGEN**) とのバトルでオーバーテイクシステム (**OTS**) を使い果たしたことが少し悔やまれます。少しでも温存できていたら、終盤ではトップの坪井翔選手 (**JMS P.MU/CERUMO・INGING**) とのバトルでもっと戦えたと思います。2番手の松下信治選手をパスした時点で **OTS** が終わってしまったことが残念ですが、自分の力を出し切って松下選手をオーバーテイクできることができたことはよかったです。勿論、2位の結果について悔しい気持ちはありますが、何よりも自らの力を出し切ったと思えるレースをすることが重要だったので、それはしっかりとできました。精神的にも落ち着いて戦えました。7番グリッドからのスタートで、混戦の中でしっかりと生き残り、順位を上げ続けられたことはよかったです」

以上

